



平成18年5月お木曳き行事

富の神明さま

発行所
三富、富岡総鎮守
神明社
社報第1号
〒359-0002
所沢市中富1507
社務所電話
04-2943-1709
宮司宅電話
049-259-2228

発刊にあたって

宮司 林 伊佐雄

何ごとのおはしますかは知らねども
忝なさに涙こぼるる

西行法師が伊勢神宮に詣でた時に詠んだ句です。

宇治橋を渡りながら神路山を眺め、清らかな五十鈴川に手をひたし、鬱蒼とした大杉の木立の中、玉砂利を踏みしめて御垣内に進んでいくと、自ずからそんな厳肅な気持ちになっていきます。

五月二十日から二十二日にかけて第六十二回式年遷宮のお木曳き行事に参加させていただきました。伊勢神宮では、二十年に一度、御社殿から御宝物、御装束を一新し、大御神様に新宮にお遷りいただいています。平成二十五年の御遷宮に向けてすでに昨年より様々な神事や行事が始まっています。

前日に二見興玉神社で、心身を清め、当日朝、伊勢市内の出発地に集合し、一日神領民になって社殿のご用材の原木を内宮・外宮まで奉曳させていただく。出発式では、地元神領民の私達を迎える温かさで成功への熱気がひしひしと伝わってきました。奉曳車から二本の白綱が伸び、

勇ましい木遣り音頭に合わせて『エンヤ！エンヤ！』のかけ声とともに曳いていく。奉曳の列は長く、先頭から後方の奉曳車は見えない。小さな子供からお年寄りまで、揃いの白い法被を身にまとい、心を一つに合わせ、約一キロ余りの道のりを進む。杉木立におおわれた外宮に無事到着すると、万歳三唱とともに大きな達成感と感謝の気持ちで一杯になった。この日の参加者は、千三百人にも及んだという。

自ら手綱を握り、ご用材を奉曳させていただきましたこと、あらためて脈々と流れる悠久の歴史の中で生かされていること、そして、まさしくお伊勢様は私達日本人の心のふるさとであり、私のお伊勢様でもあることを強く実感させていただきました。

この度、お陰様をもちまして社報『富の神明さま』を発刊することができました。

折しも、秋篠宮家に親王様ご誕生の慶事にふれながら、本稿を書き上げているところでした。昨年来より皇室典範改正問題では、皇室の行く末を案じておりました。男子皇族誕生とはいえ、皇統の安定を考えると旧宮家の復帰等、日本の伝統と歴史に則り、しっかりとした議論を展開していくことが急がれると思います。

発刊にあたり心より親王様のご誕生をお慶び申し上げます。



ご挨拶
総代会長 阿部 征一

当神明社は、三富・富岡地域の産土の神社です。私も総代は、氏子並びに崇敬者の皆さんの代表であり、宮司さんに協力し「神社の世話人」として春秋のお祭り等神社の行事にご奉仕させていただいております。

近年、都市化とともに神社を取り巻く環境は著しく変化しております。氏子区域にも新たな住宅街ができ年々初詣の参拝者も増えてはおりますが、一方で家庭での神棚祭祀は減少しつつあります。

そうした中、当社は神社本庁より埼玉県で「一社、大変名誉な『教化モデル神社』」の指定をいただくことができました。

これを契機に氏子の皆さんとの交流を図り、様々な事業を展開して近隣の神社のモデルとなるよう微力ながら尽力していきたいと考えております。

早速、この度は社報『富の神明さま』を発行できる運びとなりました。社報を通して神明社に対して少しでもご理解をいただくとともに、ご社頭の更なる繁栄のために皆様方のご指導ご協力をいただけたら幸いです。ご

平成十八年度 総代役員紹介

四月十五日執り行われた春祭りの後、定例の総代会が開催され、平成十八年度の総代会の役員並びに総代の皆さんが承認されましたのでご紹介致します。再任又は新任されました方々のご協力をお願い致しますと共に、退任されました方々の協力に心より感謝申し上げます。

会 長	上富新道	阿部 征一
副会長	木の宮・多福	本田 五郎
副会長	中富中部	鈴木 平二
会 計	下富西	山崎 一生
総 代	上富一区	矢島 健時
	上富二区	武田 功
	上富三区	田中 光次郎
	上富三区	井田 貞夫
	中富東部	仲 光男
	中富西部	野村 敏治
	下富東	原島 升
	旧十四軒	田代 賀一
	久米新田	宮野 清
	神米金	黒須 秀雄
	北田	関口 文夫
	所沢新町	新井 公一
	岩岡	青木 茂
	岩岡町	粕谷 定司

氏子崇敬会・婦人会 青年会結成される

九月六日(水)三芳町の料亭「角家」において、神明社氏子崇敬会、婦人会、青年会の設立総会が行われました。崇敬会は、近年氏子区域外の参拝者が増え、そうした方々の要望を受け、また婦人会・青年会は、若い青年や女性の皆さんに少しでも神様や日本文化のを知っていただき、神社に足を運んでいただきたいという目的で結成いたしました。

事業としては、年間に一〜二回程度の親睦を兼ねた研修会やお祭りへのご奉仕を考えています。

また、当日は、神話の啓蒙セミナーとして『神話って何?』神話の読み聞かせを通して』と題して、日本子ども本研究会理事の代田知子先生に日本神話の読み聞かせとご講演をいただきました。

役員は左記の通りです。

- 崇敬会会長 篠原拓平(二二名)
- 青年会会長 阿部儀久(三七名)
- 婦人会会長 小山良子(一七名)



名誉宮司挨拶

教化モデル神社に指定

神社本庁より埼玉県で一社

当神明社は、平成十七年十二月神社本庁より第十一期神社振興対策教化モデル神社として指定を受けました。

神社振興対策は、「氏子・住民と神社との密着をはかる諸種の方途を講ずることによって、その神社の振興をはかると共に、更に周辺神社に対しても良い刺激を与え共に隆昌させること」を目的に、昭和五十年より開始された施策です。

埼玉県では、当神明社一社で、実施期間は平成十八年四月一日から三年間です。この間、神社本庁より教化活動に関わる各種の情報や情報資料の提供、ならびに若干の資金的援助が行われます。その他、教化モデル神社の宮司を対象とした研究会も開催されます。

宮司研究会開催される

去る三月十三日、十四日と二日間にわたり国民精神研修財団において、第十期・第十一期の教化モデル神社の宮司合同研究会が開催されました。各県二名約七十名あまりの宮司が参加し、前期第十期モデル神社の活動報告を戴きました。

指定を受けた時は、どの宮司も困惑されたようですが、三年間に様々な事業を展開され大きな成果を残しておられました。当神明社においてもこれを機会に様々な方途を講じて神明社の振興のために努力していきたいと考えています。

事業計画（案）

この三年間に左記のとおり様々な事業を計画しております。

一、氏子崇敬会、氏子婦人会、青年会の結成

若い青年、婦人の方、氏子区域外の方々にも少しでも神社や日本文化のことを知っていただき、親睦を図ると共にお祭り等にも参加協力いただくべく上記の組織を作る。

二、神道啓蒙セミナー、研修旅行の開催
神話や日本文化についての勉強会、研修旅行の開催する。

三、ホームページの作成、社報（『富の神明さま』）の発刊

神社を身近に感じ、神様のことを知っていただくための情報発信。

四、鎮守の杜の整備
社殿の後ろにある鎮守の杜（雑木林）を整備。

五、地場産業に根ざした祭祀の再興

当地の産物である川越いもを普及した吉田弥右衛門青木昆陽を境内社にご祭神としてお祀りし、その威徳を顕彰する。
ご神酒としての芋焼酎や御祭神としての吉田弥右衛門さんの紙芝居を作ったりする事業も検討中。



神社庁より認定書の授与



聞き入る参加者



代田先生の神話の読み聞かせ

川越いも開拓の祖

吉田弥右衛門御遷座事業

『川越いも』作り初め二五五周年記念

秋になると三芳町の上富のケヤキ並木は、『いも街道』と呼ばれ、農家の入り口には様々な幟や看板が立ち並び、サツマイモの直売所や芋掘り観光で賑わい、秋の風物詩になっています。

かつては川越市、所沢市、狭山市、三芳町等、サツマイモは、武蔵野台地で広く栽培され、江戸時代のたび重なる飢饉や大東亜戦争の食糧難時代に飢えに苦しむ人々を救ってくれました。

そうしたサツマイモの救荒作物としての性格から、全国ではそれぞれの地域でサツマイモを普及された人は、その地域で神様としてお祀りされているケースが多く見られます。

江戸で「日本一」とまで言われるようになった「川越いも」は、今から二五五年前一七五一年（寛延四年）、所沢市の南永井村の名主、吉田弥右衛門によって武蔵野台地で初めて試作に成功し、川越いもの基礎が築かれました。

江戸時代の飢饉、先の大戦の食糧難時代、そして今日は、飽食の時代の中でサツマイモは健康食品として注目を浴びています。川越いも作り初めからちょうど二五五五年の今年、

その功績を称え、川越いもの産地として賑わいを見せている上富地域の産土神社の神明社に吉田弥右衛門さんを主祭神に、甘藷先生（青木昆陽）を縁のある神様（配祀神という）としてお祀り申し上げることとなりました。

遷座祭は、十一月二十三日に神明社の境内に社を建て行く予定ですが、先人達の苦勞に思いを馳せ、自然の恵みと食物の大切さを見直すためにいくつかの記念事業をすでに実施させていただいています。

五月二十七日には、サツマイモ作りに親子で挑戦する苗植え祭を、また十月九日には、いもほり祭を行いました。

また、遷座祭では、東京オリピックで聖火台を作った、川口の鋳物師鈴木文吾氏の監修により、おそらく日本で一つしかないサツマイモを抱いた狛犬、撫でると御利益のある『撫でイモ』も奉納させていただく予定です。

吉田弥右衛門さんは

川越藩南永井村世襲名主の四代目。同村を含む武蔵野台地は毎夏不作に見舞われ、アワやヒエも十分に育たない過酷な土地で、働い

ても人々の暮らしはよくはなりませんでしたが。

享保の大飢饉の三年後、幕府の命を受けた儒学者の青木昆陽は、下総国馬加村（現千葉県幕張）などでサツマイモ栽培に成功しました。「干ばつに強く、どんなやせ地にも農作物がある」という情報を弥右衛門が聞きつけたのは十六年後の寛延四年。弥右衛門は知人の仲介で上総国志井津村（現千葉県原市）のサツマイモ農家に息子の弥左衛門を送った。弥右衛門五十二歳、弥左衛門二十六歳の時でした。

わずか九日間で種芋と栽培知識を村に持ち帰った弥左衛門は弥右衛門とともにサツマイモの試作に成功したのでした。

その当時の様子が吉田家に残る「弥右衛門覚書」（所沢市文化財）に記されています。



さつまいも始作地の碑（南永井）

苗植え祭行われる



祭 苗 植 え

去る五月二十七(土)日、三芳町上富のご神園にて吉田弥右衛門さんの御遷座を記念して苗植え祭が行われました。神明社氏子総代会が中心となって、サツマイモの苗を親子で実際に植えるという農作業と、それに伴うお祭りを通して、自然の恵みと食物の大切さを知り先人達の苦勞に思いを馳せ、吉田弥右衛門さんの威徳を偲ぼうという趣旨のもと企画されたものです。

当日は、あいくの梅雨空で残念ながらご神園での苗植えはできませんでした。それでも、百名を越える親子の皆さんが集まっていたので、近所の倉庫の一角をお借りし、神事は厳肅のうちに執り行われました。

注連縄を張り、祓い清めた祭場に依り代としての柵を設け、吉田弥右衛門、青木昆陽二柱の御霊をお招きしました。神事の中で、祭主より祓い清められたサツマイモの苗が、耕作長(地元農家の代表の方)に手渡され、翌日代表者の方によって無事ご神園に植えられ

ました。お招きした二柱の神様は、収穫祭までご神園にお祀りし、サツマイモの生育を見守ってくれています。

また、当日は、吉田弥右衛門さんの御子孫にあたる吉田浩明様、川越いも友の会事務局の山田英次様にもご参列いただき、貴重なお話をいただきました。

さいしまい 祭祀舞の奉納

さらに、苗植え祭では地元の小学生十六名の女の子によって祭祀舞が奉納されました。色鮮やかな狩衣をまとった朝日舞は五人で、赤い袴に白い千早(舞衣)の豊栄舞は十一名で舞いました。当神明社では初めての奉納であり、参列された総代さんやご両親も艶やかな舞に感動していました。

講師は、埼玉県神社庁祭祀舞講師の江森茂代先生(深谷市富士浅間神社禰宜)に七回にわたって神明社拝殿にてご指導いただきました。



拜殿での練習風景



朝日舞



豊栄舞



奉納後全員で

た。参加していただいたお子さんも、当初は慣れない日本の舞の動きに戸惑っていましたが、当日は立派に披露していました。

練習から当日までの子供たちの姿を見て、日本の文化を学び、礼儀や周りの人への思いやりを育むという意味において『祭祀舞』を奉納させていただいて良かったと強く感じました。

参加されたお子さんは左記の通りです。(敬称略、順不同)

(六年生三名) 井田有里葉、忍田奈津美、鈴木光。(五年生九名) 新井玲美、岸澤瑛美、奈、斉藤芙美、佐藤美咲、島田悠喜美、橘里菜、松浦葵、早川千美由、林小百合。(四年生三名) 井田絵里香、大木美紀、森田菜々。(一年生一名) 井田優香。

なお、十一月二十三日の遷座祭にも祭祀舞の奉納を予定しています。

総代会研修旅行に参加して

平成十八年二月日～二月日

本田 五郎

毎年、神明社では恒例の氏子総代の研修旅行を実施しています。今年度は、二月十八、十九日の二日間に行ったり総勢二十名で千葉県南房総、白浜神社に行つて参りました。

初日は、早朝三芳を出発し、アクアライン「海蛸」を視察し、南房総の鴨川グランドホテルに宿泊しました。総代の皆さんは、お酒も強く、カラオケも上手な方が多くて楽しい一時を過ごし交流を深めることができました。

二日目は、約一時間バスを走らせて、南房総で有名な白浜神社に参拝をさせていただきました。南房総は、菜の花、ポピー等色とりどりの花が咲き乱れていました。神社は、そうした花に囲まれた小高い丘の上にあります、緑の多い落ち着いた雰囲気のお社でした。

日頃、神明社の総代をさせていただいていますが、他の地域

の神社を視察することは勉強になり、産土神社のご奉仕の上でも大変参考になると思います。

来年は、氏子の皆さんとの伊勢神宮へのお木曳き行事を予定しており、今から楽しみにしております。二泊三日、バス二台八十名の企画です。是非大勢の皆さんにご参加いただけたらと思います。



総代研修旅行

神社と私

上富囃子保存会 大木和夫

この度社報発刊、お喜び申し上げます。

何と申しまして、神社と私の関係につきましては、神明社拝殿にて宮司林伊佐雄、千郷ご夫妻のご結婚式の儀に雅楽の演奏をさせていただいたことであります。当時、父親も神社の役員をさせて頂いておりました。ありがたいことです。

祭り囃子のことですが、学校卒業後、地元的地蔵尊祭礼での、あの笛、太鼓の音が好きで、何とか仲間に入れないものかと思いつつも、仕事の都合上、東京で修行しなくてはならなくて、いつしか忘れていました。

四月のある日、まもなくお地蔵様のお祭りがやって来るのが思い浮かびました。

そして、囃子連の中には伊東文夫氏、同業者の諸星さんもいました。『四十の手習い』という言葉があるけれど、笑われてもいいと思ひ、思い切つて話をしてみました。人数が少ないので是非と言

われしました。三日か四日後には祭礼の日を迎え、屋台の上で太鼓をたたかせて頂きました。そして、その年の神明社の祭礼に囃子の奉納をさせて頂いた思い出があります。

その後、地域住民の協力で囃子保存会を設立することができました。以後、神明社の元旦祭を始め、地元の祭り、三芳町の行事に参加させて頂いております。今後も続けていく所存です。



元旦祭で囃子の奉納

Q & A

神様のお話

質問.. 神道(しんとう)について 教えて下さい。

神道の起源はとても古く、日本の風土や日本人の生活習慣に基づき、自然に生じた神観念です。このためキリスト教のような開祖はいませんが、「聖書」のような教典もありませんが、『古事記』、『日本書紀』、『風土記』などにより、神道のあり方や神々のことを窺うことができます。

神道は、日本人の生活と深い関わりがあったので、仏教が大陸から伝来したのちに、御祖神(みおやがみ)の御心に従う「かむながらの道(神道)」として意識されるようになりました。神社の創立の由来はとても古く、それぞれの土地や氏族の神話的な淵源に根ざしたものです。

神道の特徴の一つとして、外来の他宗教に対する寛容さを挙げることができます。神道は仏教や儒教・道教なども習合し、中世から近世にかけてさまざまな思想的な展開が見られ、日本の文化に大きな影響を及ぼしました。しかし、我が国独自の神観念は変わらず、現在まで脈々と受け継がれています。

これは、神道の神観念にもよると考えられます。八百万(やおよろず)の神と言われるように山、川、水、火など森羅万象あらゆるものが、それぞれの働きによって神になりうるという価値観があり、仏教の仏(ほとけ)も当初はそうした多くの神々の一神と捉えられていました。こうした多様な価値観は、自然環境を守っていくという観点からも、世界の宗教学会でも注目されています。

また、神道の特徴として神々を敬い祖先を大切にする(敬神数祖)といった考え方があります。これは、神々が他の宗教のように隔絶された存在ではなく、人は亡くなると神になり、その祖先神が私達を守ってくれているという他界観が背景にあります。

『神道とは、自然と共に生き、祖先と共に生き、人々と共に生きる道である。』という言葉もあります。

★七五三祈願について

本年度は左記の日程にて実施いたします。それ以外の日時をご希望の方は宮司まで直接ご連絡下さい。

- 十一月 五日(日) 午前十時〜正午
- 十一月 十一日(土) 午前十時〜正午
- 十二月 十二日(日) 午前十時〜正午
- 十二月 十五日(水) 午前十時〜正午

《今日の言葉》

日々を神と生きる

目に見えぬ神にむかひてはちざるは

人の心のまことなりけり

明治天皇御製

普通では目に見ることのできない神様に向かって、少しも恥ずかしくないという清らかな正しい心境というものは、誠の心で、それは私達にとって最も貴いものであります。

神は人の敬けいによりて威いを増し

人は神の徳とくによりて運そを添ふ

御成敗式目

いかなる神も人間の崇敬を受けてこそ、その威力を増すものです。また、人が人としての運命を与えられるのは、神の徳によるものです。

平成十九年

第六十二回神宮式年遷宮

第二次お木曳行事

式年遷宮とは

伊勢の神宮では二十年に一度、御正殿以下の御社殿や御装束・御神宝をはじめ一切を一新して、清々しい新宮へ大御神さまにお遷りいただくおまつりが執り行われています。このおまつりを式年遷宮と称し、今から千三百年前に天武天皇がお定めになった制度です。以来、絶えることなく連続と親から子へ、子から親へと受け継がれ、平成二十五年には第六十二回神宮式年遷宮が行われることになっていきます。平成十七年五月には天皇陛下のお定めを仰いでご用材をお山から伐り出す最初のお祭りである「山口祭」が行われました。

お木曳(ひ)き

このように着々と準備が進められ、平成十九年にも、今年に引き続き木曾のお山から伐り出されて伊勢に運ばれたご用材を木遣り音頭も勇ましく内宮・外宮に奉曳する「第二次お木曳行事」が予定されています。

この行事は元来、伊勢の旧神領民だけがご奉仕する慣例でありましたが、昭和四十八年の第六十回遷宮のお木曳に際し神宮御当局・地元奉曳団の理解により全国の崇敬者の方に

も「一日神領民」として参加できるようにになりました。奉仕の前日に二見浦において「浜参宮」をして頂くなど、伝統行事への奉仕に一層意義ある内容になっております。

浜参宮

白砂青松とたたえられる二見浦の砂浜八キロ余り、ここはむかし清渚と喚ばれ『みそぎの浜』として知られたところです。

ここに鎮座するのが二見興玉神社です。江戸時代のお伊勢参り(おかげ参り)には、みそぎの浜で心身を清める「浜参宮」が盛んに行われました。その伝統にあやかり、奉曳前日にお参りします。

■実施時期 平成十九年五月二十五日(金)

〔五月二十七日(日)〕

■実施日程 二泊三日 全行程バス利用

■旅行代金 六三〇〇〇円(お木曳参加料)



小さなお子さんもエンヤ!



外宮到着のご用材

七五〇〇円含む)

■行程

一日目 当地を早朝出発し、二見にて浜参宮を行い鳥羽温泉泊。

二日目 午前八時頃出発し、指定されたお木曳車を外宮まで奉曳し、外宮参拝後解散。

引き続き内宮に参拝。長島温泉又は長良川温泉泊。

三日目 熱田神宮参拝等観光後、夕方着。

■定員 八十名(定員になり次第締め切らせていただきます。)

■申し込み 所定の申込み用紙に申込金を添えて、各地区総代まで十一月十五日までにお申し込み下さい。申込み用紙は総代にお尋ね下さい。

■企画・実施 (株)TFR 川越支店

吉田弥右衛門御遷座事業 ご奉賛のお願い

吉田弥右衛門御遷座に伴い境内社の新築、狛犬の設置等の境内整備にご協力をお願い致します。

- 一、総工費約五百万円
 - 一、一口二万円以上
- ご奉賛いただける方は総代もしくは宮司までお問い合わせください。